

早稲田建築
in
北海道

早稲田大学建築学科 創設100周年
稲門建築会 北海道支部 記念事業

Waseda
Architecture
in Hokkaido

2011

早稲田大学建築学科創設 100 周年
稲門建築会 北海道支部 記念事業

早稲田建築 in 北海道

Waseda Architecture in Hokkaido
2011

目次

はじめに. 早稲田大学稲門建築会 会長 祝辞
北海道支部長 挨拶

第1章. 北海道に足跡を残した大先輩の業績

- 1、田上 義也 (友 T5) 1899 年生・早稲田工手学校 8 回卒
- 2、中村 鎮 (苗 T3) 1890 年生・早稲田大学旧制 2 回卒
- 3、亀井 勝次郎 (苗 9) 1910 年生・早稲田大学旧制 22 回卒

第2章. 早稲田建築 in 北海道 100 選

第3章. 座談会「早稲田建築と私」

おわりに. 編集後記

100年の歴史から今を視る

早稲田大学 稲門建築会
会長 中川武

早稲田大学建築学科創設100周年を記念して、村松前稲門建築会長はじめ理事会の皆さんが「早稲田建築100年誌」を編まれた。それに呼応して北海道支部の皆さんが本誌を刊行された。とても素晴らしいことだと思います。

私には、早稲田の中に二つ好きなものがあり、二つの誇るべきものがあると信じています。一つは「大隈講堂」であり、一つは「集まり散じて 人は変われど 仰ぐは同じき理想の光」という校歌の一節です。前者は立ち姿として具体的なイメージを、後者はそれを支える理念を変わず私たちに伝えてくれる、一つの場所のことかもしれません。早稲田の建築が何故この世に生を受け、何が生み出され、今後何を継承していくべきなのか、という100年の歴史の問いを集約する答えがそこにあるように思います。

近代化へ離陸しようとする極東の若き国へ長い伝統に培われたヨーロッパ折衷様式建築の理念をJ.コンドルは伝え、富国化への困難の中でその法灯は辰野金吾、佐藤功一の手によって早稲田へ託された。大隈講堂の佇まいは、多様なエネルギーを宇宙の光へと昇華するために受け止め、研鑽によって、市井の人々の生活へと解き放っていくことの大切さを柔らかく、しかし確固として、今も私たちに語りかけてくる。深く、厚い危機の中にある今だからこそこの場所に馳せ参じてくる人々の想いを信じることができるように思います。

北海道の文化や建築には透明なロマンチズムの中に、不屈の精神をそっと忍ばせているものがあるように思っていたのですが、本「北海道支部100年誌」に改めてそれを発見することができました。おめでとうございます。

本科創設100周年にあたり

稲門建築会 北海道支部
支部長 染谷哲行(苗48)

1910年(明治43年)、早稲田大学理工学部建築学科が創設されました。創生期の主な先生方には、佐藤功一(建築一般・設計製図・西洋、日本建築史)伊東忠太(東洋建築史)内藤多仲(構造学)今和次郎(装飾画)などが居並んでいます。

100年という時間を、実感を持って想像することは難しいのですが、100年前の創生期のことを想像すると、思わずワクワクしてしまいます。佐藤功一32歳・伊東忠太43歳・内藤多仲24歳・今和次郎22歳でした。

大正3年卒の二期生には中村鎮先輩の名前も見当ります。六期生には村野藤吾、七期生(17名)には今井兼次・木村幸一郎・十代田三郎と、後の教授が顔を揃えています。北海道支部初代支部長の太田正之は八期生(大正9年)です。

一昨年の支部長会議で村松会長から「本部で100周年記念事業を企画しますが、地方の支部でも何か企画して、盛り上げて頂けますか？」とお話があったのをきっかけに、懸案だった『北海道の早稲田建築の記録収集』を支部総会で諮ったところ、ご支持いただき、昨年4月に第一回委員会を開くことになりました。

当初は純粋な記録を想定していましたが、回を重ねて行くうちに、「読んでためになり、見ても楽しい」企画に変貌していきました。さすが稲門というべきですが、広げた風呂敷で包むに値する内容にするべく努力した1年間でした。

この記録が、次の早稲田建築北海道100年の始まりになることを願っています。

第1章

北海道に足跡を残した大先輩の業績

- 1、田上 義也 (友 T5) 1899 年生・早稲田工手学校 8 回卒
担当:藤田崇 (芽 H7)



- 2、中村 鎮 (苗 T3) 1890 年生・早稲田大学旧制 2 回卒
担当:石塚和彦 (苗 H5)



- 3、亀井 勝次郎 (苗 9) 1910 年生・早稲田大学旧制 22 回卒
担当:白 俊彦 (苗 51)



田上義也 (1899～1991) ーエゾライトと称された巨匠ー



田上義也(本名:吉也)の生涯、明治・大正・昭和・平成の四つの時代を駆け抜けた92年間。建築と音楽を愛し、様々な人との出会いに恵まれ、建築設計を中心に幅広い活動で活躍。

北海道での建築界の先駆者として、実に多くの作品を作り上げた。活動の場は建築界に留まらず、音楽界や教育界など文化人として、グローバルな視点を持った早稲田人らしく幅広い功績を残している。

ごく一部ながら、略年譜による人生歴と作品歴から偉大な功績と共に豊かな人柄や多くの人との繋がりが見えて来る。そんな田上義也の足跡を辿ってみたい。

(文:藤田 崇)

■ 略年譜

- 1899年(M32) 0歳 5月5日栃木県那須野原に生まれる。
- 1913年(T02) 14歳 青山学院中等科入学。
- 1914年(T03) 15歳 早稲田大学付属早稲田工手学校入学。
- 1916年(T05) 17歳 早稲田大学付属早稲田工手学校卒業。(友大5)
通信省大臣官房経理課営繕係勤務。
- 1919年(T08) 20歳 帝国ホテル建設事務所に入所。
- 1923年(T12) 24歳 9月、帝国ホテル竣工披露パーティー当日に関東大震災。
11月、北海道へ。
田上義也建築制作事務所開設、富貴堂楽器部教授就任。
- 1924年(T13) 25歳 2月、豊平館で演奏会、ピアニスト小川隆子と共演。
4月、留萌・道東・国後の旅へ。
- 1925年(T14) 26歳 3月、岩内でヴァイオリン独奏会。
4月、札幌時計台で「田上義也建築作品展」。
- 1926年(T15) 27歳 多くの住宅設計を手掛ける。
- 1927年(S02) 28歳



※下線付き建物は現存を示す
バチエラー学園(札幌)

旧高田邸(小樽)

田上自邸兼アトリエ(札幌)

旧札幌北一条教会(札幌)

旧上田邸(小樽)

坂邸別邸(銭箱)

旧小熊捍邸(札幌)

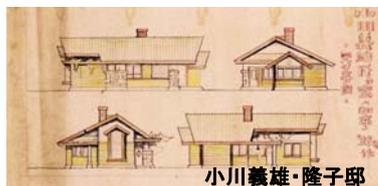
旧坂牛邸(小樽)

小川夫人の家(札幌)

旧佐田邸(函館)

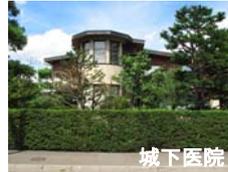
小川義雄・隆子邸(和寒)

旧瀬川邸(銭箱)



1931年(S06) 32歳

『田上義也建築画集』刊行。
純粋音楽者設立、純粋音楽誌創刊。
北海道大学文武会オーケストラ指揮。



城下医院(札幌)
幌西巡査派出所(札幌)
太秦邸(札幌)

1932年(S07) 33歳

1933年(S08) 34歳

1934年(S09) 35歳

札幌シンホニーを開く。

1935年(S10) 36歳

1936年(S11) 37歳



キャピタル(釧路)

旧相内邸(札幌)

いりかせ宇喜世(岩内)

旧北見郷土館(網走)

網走観光ホテル(網走)

北ノ王鉱山会館(遠軽)

北ノ王鉱山従業員倶楽部(遠軽)

1937年(S12) 38歳

札幌新交響楽団設立、正指揮者就任。

1942年(S17) 43歳

札幌音楽協会理事長就任。

1944年(S19) 45歳

帝産航空株式会社取締役就任。

1951年(S26) 52歳

日米戦争後、建築事務所再開。
北海道建築士審査会委員。



帝産航空落部工場(八雲)

1954年(S29) 55歳

1957年(S32) 58歳

北海道建築士会理事。

1958年(S33) 59歳

1960年(S35) 61歳



旧小笠原法律事務所 住宅改修(旭川)

西城八十歌碑(函館)

支笏湖ユースホステル(千歳)

宮ヶ丘ユースホステル(札幌)

北海道銀行本店(札幌)

旧カナリヤビル(札幌)

北湯沢ユースホステル(大滝)

1962年(S37) 63歳

北海道銀行嘱託。



1963年(S38) 64歳

第一次北海道総合開発功労者知事賞、同道民大会賞受賞。

1964年(S39) 65歳

日本ユースホステル協会功労賞受賞。

1965年(S40) 66歳

北海道文化賞受賞。



八雲町公民館(八雲)

美幌ユースホステル(美幌)

春香山房「本郷新アトリエ」(小樽)

坂本直行アトリエ兼住宅(札幌)

ニセコローヤルロッジ(ニセコ)

北海道銀行洞爺クラブ(洞爺)

1966年(S41) 67歳

全日本学士会アカデミア賞受賞。

1967年(S42) 68歳

1968年(S43) 69歳

北海学園大学工学部教授。



旧北海道立青函トンネル記念館(福島町)

旧定山溪ニューグランドホテル(札幌)

フィリピン バギオ市平和の塔(フィリピン)

室蘭ユースホステル(室蘭)

人形劇場こぐま座(札幌)

1971年(S46) 72歳

勲四等瑞宝賞受賞。

1972年(S47) 73歳

日本建築家協会北海道支部長。



1974年(S49) 75歳 米国アリゾナ州ワールド大学名誉工学博士号。
 1975年(S50) 76歳
 1976年(S51) 77歳 北海道建築設計監理事務所協会初代会長。
 1977年(S52) 78歳 第一回札幌市芸術功労賞受賞。
 1978年(S53) 79歳 北海道開発功労賞受賞。
 1979年(S54) 80歳
 1980年(S55) 81歳
 1981年(S56) 82歳
 1984年(S59) 85歳
 1987年(S62) 88歳 「田上義也ドローイング展」開催。
 1991年(H03) 92歳 8月17日死去。



北海道銀行白老支店



旧北海道青年会館



北海道立旭川美術館



札幌市豊平川さけ科学館

旧北海道青年会館(札幌)
 北海道銀行白老支店(白老)

札幌北一条教会(札幌)
札幌市教育文化会館(札幌)
北海道立旭川美術館(旭川)
本郷新記念 札幌彫刻美術館(札幌)
札幌市豊平川さけ科学館(札幌)



本郷新記念 札幌彫刻美術館

■ 田上義也の軌跡

明治・大正・昭和・平成の四つの時代を駆け抜けた田上義也(本名:吉也)の92年間を眺めてみると、「人」、「出会い」、「音楽」、「信仰」など、意外にも「建築」以外の多様なエピソードが沢山あったように思われる。しかし、その多様なエピソードが皆「建築」と多大な関わりを持って、数多くの作品が生み出されたようである。

「人」・「出会い」・「音楽」

- ・ 北村透谷婦人(作家夫人)
 青山学院中等科時代、北村透谷婦人の営む下宿で暮す。ここでは、島崎藤村や有島武郎などとも出会う。
- ・ 内藤多仲(建築家)
 従兄弟である田上耕之助(早稲田大学理工科卒)の影響で早稲田へ入学して出会う。その後、内藤多仲の斡旋で逓信省に就職。
- ・ フランク・ロイド・ライト(建築家)
 求人広告によりライトの率いる帝国ホテル設計事務所へ入所して出会う。
- ・ アントニン・レーモンド(建築家)
 ライトの帝国ホテル設計事務所時代に兄弟子にあたるレーモンドと出会う。
- ・ ジョン・バチェラー(宣教師)
 北海道へ向かう列車で出会う、後に来道一作目の「バチェラー学園」を設計。これを縁に来道直後はバチェラー邸で暮らす。



バチェラー学園



旧小籠禊邸



旧佐田邸外観



旧佐田邸内観

- ・ 富貴堂(札幌の老舗書店)
来道直後、富貴堂の楽器部でヴァイオリン教授開始、これを縁に富貴堂書店の改修設計。後に店主である中村信以の自宅も設計。
- ・ 北海道大学(旧北海道帝国大学)
教授であった小熊捍の住宅を手掛けた事により、多くの教授達と出会う。
また、富貴堂でのヴァイオリン教室の生徒に同大学の学生も多かった。
- ・ 橋浦泰雄(画家・民俗学者)
来道直後、一緒に留萌、道東、国後を旅して北海道での建築活動を決意する。
- ・ 木田金次郎(画家)
橋浦泰雄との縁で出会う、そして木田の住む岩内で「田上義也ヴァイオリン独奏会」開催。この独奏会を期に橋浦の作詞で「岩内の歌」を作曲。
- ・ 坂本直行(画家)
友人だった坂本が離農し、画家へ転身する際にアトリエ兼住宅を設計。アトリエ開きの際にはヴァイオリンを演奏。
- ・ 帝産航空株式会社
八雲の帝産航空落部工場を設計し、取締役となる。
- ・ 島本融(北海道銀行初代頭取)
旧小熊捍邸を頭取住宅として島本が住んだ事を縁に出会う、後に北海道銀行本店や支店等 80 件以上の銀行関係建物を設計。



幌西巡査派出所



キャピタル



いりかせ宇喜世



旧北見郷土館



田上自邸兼アトリエ

前記の出会いのごく一部ながら、これらの「出会い」を通して田上義也の豊かな人柄と幅広い才能と見識を知る事ができる。建築を志す以前、ヴァイオリンを通して音楽、島崎藤村や有島武郎などとの出会いを通して文学、そして幼少期から得意だった絵画など様々な文化的興味を持ち、早稲田大学へ通っていた従兄弟の影響を受けて早稲田及び建築の世界へと入っていった。

早稲田を卒業してから 75 年の軌跡を見ると、1920 年代は住宅設計、1930 年代は商業建築、1940 年代は日米戦争に伴い建築と音楽活動の休止、1950 年代は建築活動の再開、1960 年代以降は銀行やユースホステル等の公共建築の設計、と時代背景に左右されながらも、早稲田で学んだ建築を軸として実に多くの建物を創りあげた。これらの建物からは、「人」・「場所」・「時代」と真っ正面から向き合い、建築に込めた熱い思いと信念が伝わってくる。

多くの人に感動と喜びを与え、後世も語り継がれる足跡を残した軌跡を知ると、部類も無いエネルギーとパワーを持った田上義也の偉大さを改めて感じ得ます。

中村 鎮（1890～1933）－北海道で花開いた「鎮ブロック」－

中村鎮は、学生時代から建築評論家として活躍をしたことで知られていますが、その建築評論活動や建築観は、経済性や合理性を重視するものであったと言われていました。

一方で、中村鎮自身が考案した「鎮ブロック」（中村式鉄筋コンクリートブロック造）は、大正10年の函館大火に遭うことがきっかけとなり、函館大火復興の火防線の建築として花開きました。

このことは、自身の評論活動において提言した鉄筋コンクリート建築普及のための建築費の低廉化を、自身の「鎮ブロック」の技術と造形によって具現化していくことで、鉄筋コンクリート建築の普及確立の過渡期であった当時において大きな役割を果たしたといえるでしょう。

（文：石塚 和彦）



中村 鎮（なかむら まもる）
1890年～1933年

■ 中村式鉄筋コンクリート構造の概要

中村鎮は、耐震性・耐火性・耐久性を持つ鉄筋コンクリート建築物の日本における普及のため、建築費が当時の鉄筋コンクリート建築物の約2/3と経済的な中村式鉄筋コンクリート構造を提案しました。そして、大正から昭和の初期に、北は北海道から南は沖縄まで全国に119棟もの中村鎮式鉄筋コンクリート造を建設しました。現存する建物もいくつかあります。

中村式鉄筋コンクリート構造は、中村鎮が大正時代に耐久性・耐火性に優れた鉄筋コンクリート構造を木造と同等の価格にすることを目指して開発した構造です。

当時の鉄筋コンクリート建築物は、基本的に材料のセメントや鉄筋が高価でした。さらに、コンクリートを柱や梁の形に流し込むための型枠も、木造住宅と同じ程度の木材を使うほど施工が大変で、材料と施工の両面から見て高価な構造でした。

そこで中村鎮は、型枠材料として板状に成型したコンクリートを開発しました。「鎮（ちん）ブロック」と呼ばれる独自のコンクリートブロックを型枠として組上げ、その間にコンクリートを部分的に流し込みます。そして鎮ブロックはそのまま仕上げとして用いることで、セメントや鉄筋を節約する工法を考案し、全国でそれを実践しました。

<年譜>

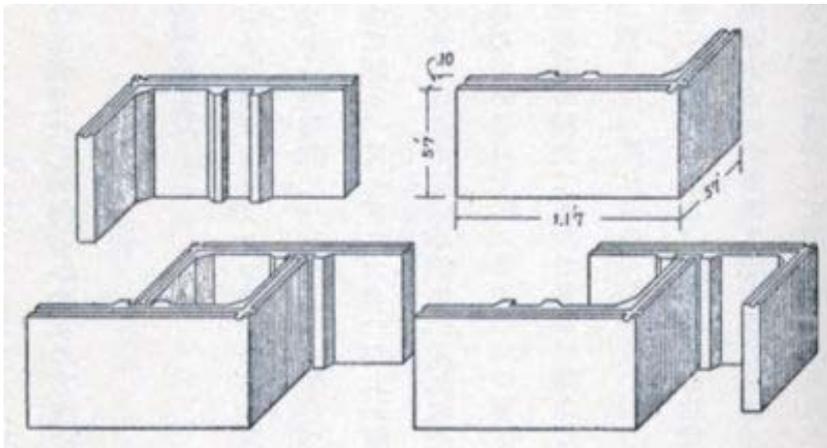
- ・1890年 福岡県糸島郡波多江村生まれ
- ・1910年 早稲田大学理工科入学
- ・1911年 同学科修了、本科に入学し建築科を専攻
- ・1914年 早稲田大学理工科建築科卒業（苗大3）
（2期生）成績優等（甲）
- ・1915年 東京外国語学校専修科仏蘭西語科入学
- ・1916年 陸軍東京経理部附を命ぜられる
- ・1917年 依願免官
- ・1918年 東洋コンクリート工業株式会社技師
- ・1918年 中央工学校高等科歴史学講師
- ・1919年 日本セメント工業株式会社技師長
- ・1921年 私設「中村建築研究所」設立
- ・1928年 早稲田大学附属早稲田高等工学校
建築歴史学講師就任
- ・1933年 死亡

（中村鎮遺稿集より）

■ 型枠材料の特徴

中村式鉄筋コンクリート構造の型枠材料の特徴は、従来の木材を用いた転用型枠でなく、施工現場にてコンクリート製型枠を製作し、この型枠をコンクリート打設後も使用するパーマネント型枠とした点です。その結果、外壁の化粧材を兼用し内部のコンクリート保護による耐久性・耐火性も向上します。そして、仮設材料が少なくなり施工性に優れる利点があります。

その型枠材料の形状は、図1に示す鎮ブロックと呼ばれる板状のL型のコンクリート製品（重さ約8kg）で、壁や床などの全ての構造体を構成しています。鎮ブロックは、壁体や床スラブの型枠材料として建物の施工に必要な枚数だけ建設現場にて製作されていました。



<図1 鎮ブロックの詳細（中村鎮遺稿集より）>

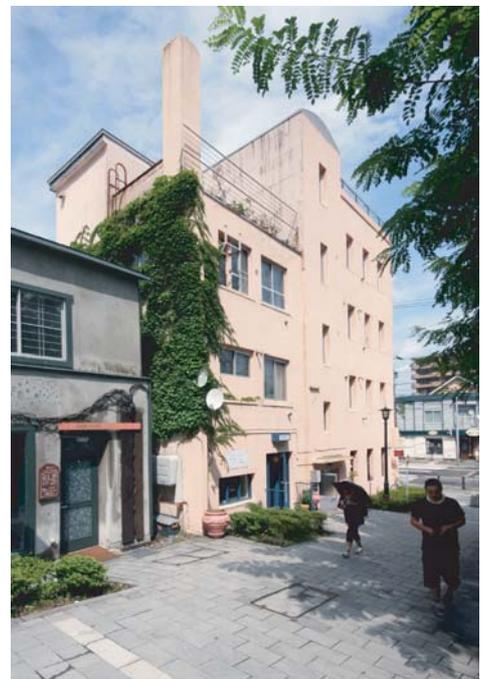
■ 壁体の特徴

中村式鉄筋コンクリート構造が、当時の鉄筋コンクリート建築物と比較して経済的な理由の一つは、壁体では鎮ブロックを組み合わせた空洞部分の隅角・T字型部や開口部廻り及び壁梁部分のみコンクリートを打設している点です。そのため、建物全体に対するコンクリートの使用量も減り、建物自体の自重が減じられる分、使用する鉄筋量も少なくなります。

また、コンクリートを打設していない壁の空洞部は、設備配管にも活用され、粉殻を保温材料として充填しています。壁の施工手順は、図2に示す隅角・T字型部の鉄筋を先組みし、この鉄筋を取り囲むように鎮ブロックを積み上げていきます。

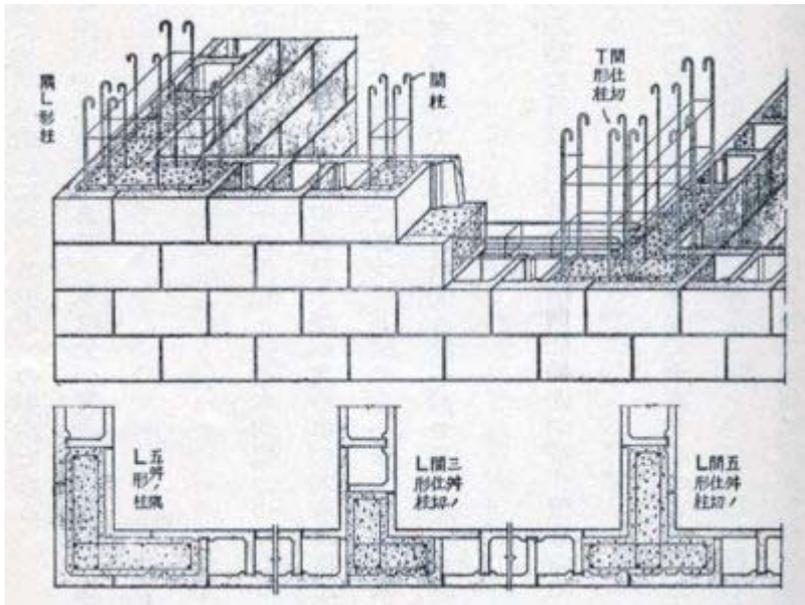
<作品>

◆旧目貫商店(北斗ビルディング)
(函館市末広町17-15)



今から90年前の大正10(1921)年12月に、目貫商店という国内外の食品を取り扱う商店のビルディングとして建てられたもの。

この工法では、ブロックが5段から8段程度積み上がると、順次、内部へコンクリートを打設します。なお間柱のない大空間が必要な建築物では、梁間方向に壁に沿って柱を一定間隔に配置した現在の壁式ラーメン構造に近い構造形式で施工されています。



<図2 壁体部分の詳細(中村鎮遺稿集より)>

◆旧丸北
(函館市豊川町1)



現在の江口眼科の向いにあったカフェ。末広町に現存する旧目貫商店と似たデザインである。この背後に写る何軒かの建物も中村の設計によるものと思われる。

■ 大正10年函館大火復興と中村鎮

中村鎮と函館の結びつきは、同市中心街49町歩余りを焼失した大正10年4月14日の大火によります。

中村鎮は、早稲田大学卒業後、陸軍省・アメリカ屋・東洋コンクリート工業・日本セメント工業株式会社を経て、大火の前年の大正9年に独立したばかりでした。函館区蓬萊町の映画館「錦輝館」(大正9年10月起工)の設計を機に函館への往来が始まり、工期中に大火に遭ったと考えられています。

函館区会は、大火直後、街区改正と火防線の設定を議決しました。火防線は街路両側または片側の5間幅に防火建築を建てる構想で、甲種火防線として蓬萊町「銀座街」(街区両側)および「二十間坂」(片側)が指定されました。

区の目論みでは、木造の通常の坪当たり建設費80円と、RC造の160円の差額を補助および低利融資でまかなうはずでしたが、実勢に合わず難航しました。そこへ中村鎮が、自身の特許鉄筋コンクリート(ブロック)造なら予定の160円以下で実現できると提案し、受け入れられたといえます。

◆旧千秋製パン・現眞光堂第二工場
(函館市宝来町24)



銀座通りと祇園通り(かつての市電通り)の角にある建物。

中村鎮の函館での作品のうち16件が、大正10年7月に一斉に起工、同年12月に着工しており、11月16日には盛大な連合起工式が行なわれました。

■ 「銀座街」火防線の建築

函館はこうした都市防火の努力にもかかわらず、13年後の昭和9年3月21日の大火で市街の大半を焼失しました。「銀座街」火防線も「道路を横断して延焼した形跡」こそなかったものの、惨禍を食い止めるには無力でした。「銀座街」の建物自体も多くが内部を焼失しています。

日本建築学会の大火調査報告によって「銀座街」の概要を知ることができます。街路両側66棟のうち、RC造24棟、コンクリートブロック造19棟、煉瓦造15棟、他に木骨鉄筋コンクリート・土蔵造が混在していました。「銀座街」のコンクリートブロック造19棟の大半を中村鎮が手掛けたことが分かっています。

■ 函館以外の中村式鉄筋コンクリートブロック構造の建築

「中村鎮遺稿」（中村音羽編 昭和11年）の中の「制作年表」には、128件の作品が載録されていますが、函館のほかに、札幌・旭川に各2件、室蘭に1件の作品が載せられています。

● 札幌測候所（大正13年）

「札幌気象百年史」（昭和51年）によれば、鉄筋コンクリート造2階建、延べ241.5坪の建築です。

● 北海道庁倉庫（大正14年、昭和41年に取り壊し）

● 旭川新聞印刷工場（大正13年、昭和46年頃に取り壊し）

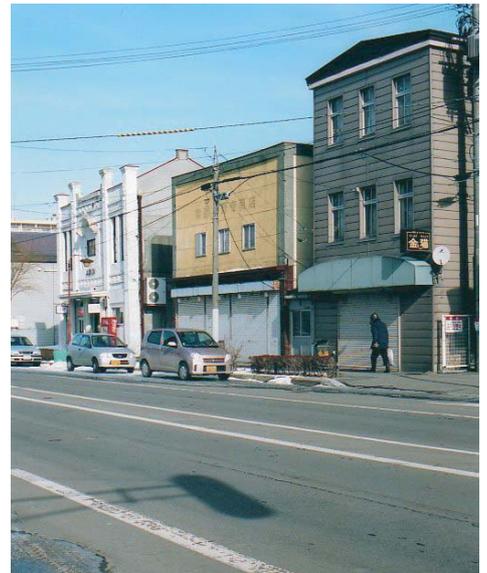
中村の報知新聞社（大正10年、東京麹町区）が大震災火に際して被害を受けなかったため、中村式鉄筋コンクリートブロックによって赤阪準吉（赤阪準一？）技師に設計施工を囑したといえます。

● 北海道電燈株式会社倉庫（大正14年、昭和40年代に取り壊し）

● 室蘭市社会館（大正15年、昭和36年に解体）

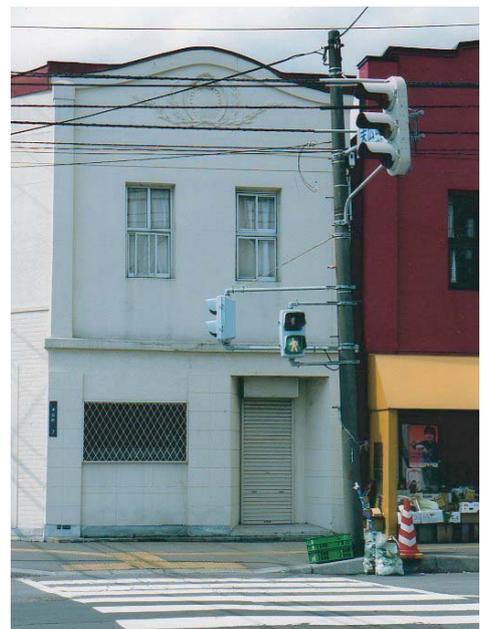
市立転業紹介所庁舎として新築され「本館間口十八間、奥行き八間・・・合計三百二十三坪八合」の建物であった（室蘭市史（昭和16年））と記録されており、戦後、市庁舎などに使われました。

◆ 旧小野寺商店ほか （函館市宝来町23）



写真手前2軒の建物が中村設計と思われる建物。

◆ 末広町7番地の建物



銀座通りと高砂通り（バス通り）の角にある建物。

<「制作年表」以外の作品>

- 室蘭市社会館付設の公益質屋および倉庫（昭和3年）
- 室蘭市立病院（大正15年、昭和26年に焼失）

<中村式鉄筋コンクリートブロック構造を利用した建築>

- 畑江邸（昭和5年）

北海道庁倉庫を施工した杉村工務店が、その後中村式ブロックの製造と普及を目的として営業したといわれ、モデル住宅として建てられました。

- 北海道拓殖銀行滝川支店（昭和8年）

コリントオーダーの古典様式建築ですが、構造は中村式鉄筋コンクリートブロック造でした。設計者の臼沢長吉は道庁技師で、同行紋別支店も手掛けています。

- 旧函館西警察署（函館水上警察署）（大正15年）

設計者の埴原欽次郎は、中村鎮の助手的な建築家であったと言われており、解体後、旧建物を忠実に再現して平成19年4月に「函館市臨海研究所」として再整備されました。

■中村鎮の建築理念

中村鎮は、戦前の日本の建築界における代表的な「建築評論家」としても、その名を知られています。

中村は、早稲田大学在学中の『建築ト裝飾』での掲載を皮切りに、評論活動を本格化させていきますが、その建築理念は、昭和2年1月号と2月号の『中央美術』に掲載された「建築の原理と草案」と、同3月号に掲載された「建築無裝飾主義」に集約的に示されています。

魚眼図

鎮ブロック

築はそもそも芸術の一分野になりうるかというテーマで、俗に「俊鎮論争」と呼ばれた思想的対立があった。東大で卒業論文「建築非芸術論」を書き、建築はもっぱら実用を旨とすべきだと主張した野田俊彦に対し、「科学の上につつま術」という論文で、建築には実用の側面もあるが、それ故にこそかえって迫力を持つ芸術になるとの論陣を張ったのが中村だった。

自由な文化的雰囲気漂う大正期らしい話は、芸術工学部で建築を教える私にも興味深く、毎年一度は授業で採り上げてきた。芸術的な空間創造に挺身する建築家というイメージが強かった中村だったが、その後は、むしろ技術者としての人生を歩んだ訳で、当の中村もそれが自らの使命だと考えていたらしい。資料はそう伝えている。

（大矢二郎・道東海大教授「建築デザイン」）

<鎮ブロックを利用した建築物>

- ◆ 北海道拓殖銀行（現北洋銀行）滝川支店（滝川字大町1）



- ◆ 函館臨海研究所（函館市大町13-1）



- ◆ 解体前の旧函館西警察署（函館水上警察署）



函館市臨海研究所は函館の歴史的建造物である旧函館西警察署庁舎を解体後、旧建物を忠実に再現して「臨海研究所」として再整備したものの。

昨年、函館西部地区にオープンした函館市臨海研究所の建物は、大正十五年（一九二六年）に建てられた旧・函館水上警察署（函館西警察署）を解体・復元したもので、湾岸の歴史的な景観にひとときワレトロナ色を添えている。

二階のメモリアルホールに展示されている資料には、解体前の構造が「中村式鉄筋コンクリートブロック造」であったと記されている。大正十年（一九二一年）の大火後、市街地の不燃化を図る目的で若き技師・中村鎮が函館に招かれ、市内二十数棟の建物が彼の考案した型枠ブロック工法で建てられた。これは通常の木製型枠の代わりに「I字断面のコンクリートブロック（通称・鎮ブロック）」を使うもので、工費の削減や工期短縮が図れる。

中村が大正初めの早稲田大学建築科出身と聞いて、私には別に思い当たる節があった。当時、建

それによれば、建築の原理の根幹になる4要素として、「一、用途の必然性 二、構造の合理性 三、用途及材料構造の経済 四、美的要求の満足」をあげており、中村はそれらの一致を理想としていました。

しかし、その一方で、中村の考えと鋭く対立する野田俊彦の卒業論文『建築非芸術論』はよく知られており、二人の論争は、「建築芸術＝非芸術論争」あるいは俗に「俊＝鎮論争」と呼ばれました。

当時の「大正建築」は、この二つの思想の糸が鋭く対立しながら縫り合わされて織り上げられたものであったといえるでしょう。

■出典・引用した文献・資料

* 中村鎮の建築理念とその評価

～鎮ブロックの技術と造形からの考察～

砂田絵理子 大川三雄

日本建築学会大会 梗概集 歴史・意匠 1994

* 「建築評論家」中村鎮の建築観

藤岡洋保

日本建築学会大会 梗概集 歴史意匠 1991

* 建築家中村鎮と北海道

越野武 角幸博 伊藤俊英

日本建築学会大会 梗概集 計画系 1982

* 建築家中村鎮と中村式鉄筋コンクリートブロック

越野武 角幸博 伊藤俊英

日本建築学会北海道支部 研究報告論文集 計画系 1982

* 近代建築史概説

村松貞次郎 山口廣 山本学治 編

近江栄 長谷川堯 山口廣 岡田新一 佐々木宏 三上祐三

村松貞次郎 著

彰国社 1978

* 中村式鉄筋コンクリート研究会WEBサイト

* 関根要太郎研究室@はこだてWEBサイト

<中村鎮に関する文献>

■文献

1. 「中村鎮遺稿」 中村音羽編 昭和11年9月5日発行

■論文および研究報告

1. 旧早稲田大学出版部倉庫にみる

中村式鉄筋コンクリート建築

佐々木昌孝 中川武 米山勇 山崎幹泰

日本建築学会大会 梗概集 2004

2. 日本基督教団須磨教会の旧会堂の耐久性調査結果

長谷川直司

コンクリート工学 VOL41 (NO. 9), 65-68 2003

3. 「鎮ブロック構造」構工法のバリエーション

長谷川直司 小野久美子

日本建築学会大会梗概集 歴史・意匠 1999

4. 日本基督教団須磨教会会堂解体調査

その1 須磨教会と「鎮ブロック」について

藤井輝恵 長谷川直司 馬場明生 守明子 渡辺光良

日本建築学会大会 梗概集 歴史・意匠 1998

5. 日本基督教団須磨教会会堂解体調査

その2 構工法特性

長谷川直司 馬場明生 守明子 渡辺光良 藤井輝恵

日本建築学会大会 梗概集 歴史・意匠 1998

6. 日本基督教団須磨教会会堂解体調査

その3 劣化状態と耐久性

馬場明生 守明子 長谷川直司 渡辺光良 藤井輝恵

日本建築学会大会 梗概集 歴史・意匠 1998

7. 中村鎮の評論活動の経緯とその特徴

大川三雄 砂田絵理子

日本建築学会大会 梗概集 歴史・意匠 1994

8. 中村鎮の建築理念とその評価

～鎮ブロックの技術と造形からの考察～

砂田絵理子 大川三雄

日本建築学会大会 梗概集 歴史・意匠 1994

9. 「建築評論家」中村鎮の建築観

藤岡洋保

日本建築学会大会 梗概集 歴史意匠 1991

10. 建築家中村鎮と北海道

越野武 角幸博 伊藤俊英

日本建築学会大会 梗概集 計画系 1982

11. 建築家中村鎮と中村式鉄筋コンクリートブロック

越野武 角幸博 伊藤俊英

日本建築学会北海道支部 研究報告論文集

計画系 1982

■その他参考資料

1. 建築人物群像 追悼編／資料編

土崎紀子 沢良子

住まいの図書館出版局(星雲社) 1995

2. 日本における鉄筋コンクリート建築成立過程の構造技術史的研究

堀勇良

東京大学博士論文 1981

3. 近代日本建築学発達史

日本建築学会 編

丸善 1972

亀井勝次郎 (1910～1981) 一拓銀の記憶と共に



亀井勝次郎、度重なる大火に見舞われた函館に生まれ、復興として次々と建てられた大正・昭和のモダン建築を見て育った勝次郎少年は建築家を志し、早稲田の建築に進むのである。

戦前、戦後を数多くの建物に携った亀井氏は旧拓銀において、我々の記憶に残る多くの店舗を設計し、旧拓銀のイメージを強烈に作り上げた。

五島軒、旧拓銀の支店群など、彼の北海道建築に残した業績は偉大である。 (文:白 俊彦)

～生い立ち～

亀井勝次郎は、1910年5月3日に当時函館貯蓄銀行頭取だった亀井喜一郎の次男として、函館で生まれた。兄は、作家・評論家として知られる亀井勝一郎である。

当時の函館は、度々の大火に見舞われ、焼失した建物に代わる復興建築が次々と新築されていた時期であった。特に勝次郎が11歳の大正10年の大火では、亀井家の自宅も焼失してしまった。その後、当時函館で活躍していた建築家の関根要太郎・山中節治兄弟により新築され現存する。

当時の復興事業は、これまでの木造建築に代わり、次々と建設される鉄筋コンクリート造のモダンな建築は、勝次郎少年にとって大いに刺激を与え、建築家という職業に憧れを持ったのではないだろうか。ちなみに、当時建築家中村鎮(別項)は、函館で低予算でも建築可能な鉄筋コンクリートブロック工法の普及に活躍していた時期である。そして、亀井勝次郎は早稲田大学建築科に入学するのである。

昭和9年(1934年)早稲田を卒業、この年3月に函館の「昭和9年大火」が発生し、函館市土木課建築係技術員として復興事業に従事する傍ら、五島軒の再建を竹下茂とともに手掛けたのであった。ちなみに、五島軒は、彼の作品としては一番よく知られ、1997年(平成9年)北海道初の登録有形文化財に札幌資料館と共に登録されている。彼は函館市に2年在籍し復興のために奔走している。



少年時代を過ごした家

経歴

- 1910年 5月3日函館に生まれる。
- 1921年 再びの函館大火にて自邸を焼失。
早稲田大学理工学部建築学科
入学
- 1934年 「函館昭和9年大火」
早稲田大学理工学部建築学科
卒業(苗 9)
5月、函館市土木課建築係技術員として従事。
- 1937年 旧満州国(昭和製鋼所)
- 1940年 旧日本海軍省技師として呉で軍事施設を建設。
- 1946年 1月、旧運輸省建設部札幌建設部(上砂川炭鉱工事事務所長)
- 1948年 北海道拓殖銀行管財課に就職。
- 1974年 同行を退職。
「旅と建築」を自費出版。
- 1975年 酪農学園大学非常勤講師
北海学園大学非常勤講師
北海道工業大学非常勤講師
- 1981年 5月12日死去



五島軒

～拓銀時代の建築～

戦時中は、昭和製鋼所の技師として旧満州鞍山市へ赴き(1937～1939)、旧日本海軍省技師として呉で軍事施設の設計・監理を行い(1940～1945)、戦後、上砂川炭鉱工事事務所長の職に就く(1946～1948)。

その後、1948年から北海道拓殖銀行管財課にて同行の店舗・社宅を数多く手掛けるのである。拓銀における亀井の設計活動は、当時の138店舗のうち亀井が設計したと確定できたのは77店舗にのぼる。それぞれの作品を年代で見るとその作品の変遷が伺える。当初は、戦前の拓銀の建築に見られるジャイアントオーダーから装飾を排除したジャイアントオーダー垂直強調型である。1950年代後半の作品にはこのタイプのものが多くみられ、重い質感、垂直性の強調、古典主義的な意匠が特徴的である。代表的な作品は旧花園支店などで現存するものとしては旧北支店がある。

次いで、1960年代前半にはジャイアントオーダー横長窓型として、2階上部まで伸びる古典的な柱は見られるが、垂直性は弱まり、ガラスの多様による内外の連続性がみられ、銀行を親しみやすいものとする意図がみられる。旧山鼻支店が典型的だが現存はしない。1963年の銀行の方針転換により、銀行の大衆化・多様化が図られ、それによって1965年前後にはガラスカーテンウォール型や水平強調横長窓型が現れる。ガラスカーテンウォール型は3層以上の店舗に、水平強調横長窓型は2層店舗に多く見られ、旧白石支店や旧西野支店などがある。

他に高層店舗(4層以上のもの)も9店舗あり、うち3店舗の隅切部分には曲線を用いたり、レリーフを飾り付けたりといった亀井の造形的創意が見られる。これは、「土が一升、お金が一升の土地を100パーセント利用しなければソロバンに合わないという考え方は、もう過去のもので、商業的には、どんなに沢山の人々を吸収するデザインをするにかかっている。」と著作の中にも表れている。

インテリアにおいても、拓銀の店舗の壁は、布地や壁紙を貼って、その上に合成樹脂をプレスしたものが使われている。これは亀井が採用した川島織物の製品である。また、マガジンラック・陳列ケース・灰皿スタンド・モザイク画といったものは亀井のデザインであり、著作の中で、「土地の家具屋に製作されてこそ、毎日の生活に溶け込んだ家具什器といえる・・・。」としている通り、上記の家具は地元で製作された。

亀井は、銀行の方針転換による大衆化・多様化の象徴としての「たぐざん」もロゴをデザインしており、建築表現として、建築そのものだけで

作品年譜

- 1934年 五島軒・平野病院
- 1952年 昭和通支店
- 1953年 八雲支店
- 1954年 入船支店
- 1955年 余市支店・花園支店・琴似支店
- 1956年 名寄支店・東屯田支店・上野支店・麴町支店
- 1957年 札幌北支店・帯広支店・釧路支店・虎ノ門支店
- 1958年 伊達支店・大阪支店・浅草支店
- 1959年 歌志内支店・美幌支店・五稜郭支店
富良野支店・難波支店・新宿支店
- 1960年 池田支店・山鼻支店・苗穂支店・桑園支店・輪西支店・釧路南支店
- 1961年 本別支店・江別支店・美唄支店・渋谷支店
- 1962年 池袋支店・板橋支店・西小山支店・本店前噴水
- 1963年 札幌西支店・北二十四条支店・恵庭支店・鳥取支店・円山支店・荻窪支店・中標津支店・羅臼出張所
- 1964年 東室蘭支店・清水支店・斜里支店・白石支店・月寒支店・永代橋支店・亀戸支店・赤羽支店・馬喰町支店・根室支店
- 1965年 二条支店・西野支店・五反田支店・中野支店・札幌南支店・旭川支店・美香保支店・南円山支店
- 1966年 蒲田支店・神田支店・薄野支店・世田谷支店・巣鴨支店・つつじヶ丘支店・武蔵関支店・札幌東支店
- 1967年 函館支店・静内支店
- 1968年 浦河支店・国分寺支店・鶴川支店
- 1969年 新小岩支店・小樽支店
- 1970年 武蔵境支店・日野支店

はなく、美術や工芸の要素もみずからがデザインし、総合的な建築空間を作っている。



—たくぎんのロゴ—

〜おわりに〜

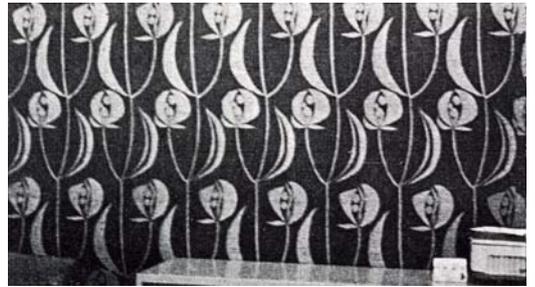
1974年、拓銀を退職した亀井は、それまでの旅の記録や亀井の自作の説明、自らの建築観を綴った「旅と建築」を自費出版する(1974)。その後「続旅と建築」の執筆を行うが、途中で病に倒れ1981年5月12日死去した。

亀井の作品の変遷を追うと、戦前の五島軒で見られた古典要素の簡略化と変形は、戦後の拓銀建築の初期にも見られるが、やがて徐々に消え、水平性・透明性・軽い質感が特徴となっていくことがわかる。

また、拓銀店舗では、「たくぎん」のロゴやモザイク画や家具などの美術・工芸の要素など、総合的に建築空間を創造していた。

拓銀は、1998年に破綻するまで、戦前、戦後の北海道の銀行建築をリードしてきた存在といえるが、その中で亀井は主導的役割を果たしたといえるだろう。銀行という半公共的な建築において、銀行の大衆化・多様化という姿勢を建築のデザインにおいても実現したことは、亀井の作品の大いなる意義と言えよう。

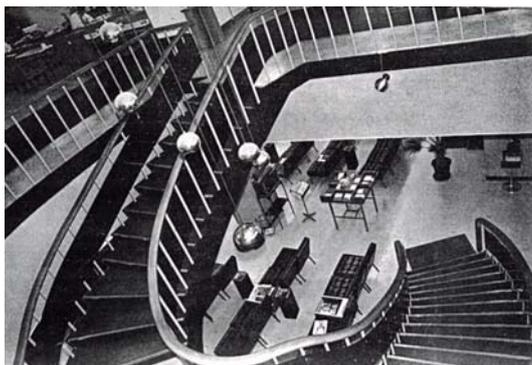
最後に、1958年から1974年までの間、稲門建築会北海道支部の総会・懇親会は毎年、亀井先輩のご好意で拓銀荘にて行われた。同会のために尽力してくれたことに感謝。



壁紙張りの壁面デザイン



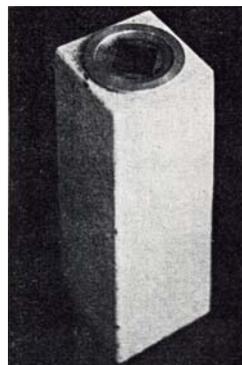
壁紙張りの階段



室蘭の支店階段



札幌南支店(003)



灰皿スタンド



マガジンラック

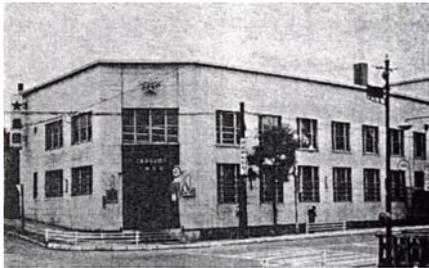


開口部のグリル



陳列ケース

〜亀井の手掛けた拓銀店舗〜 [*印は現存建物 ()内の数字は当時の店舗番号]



入船支店(048)



花園支店(047)



*名寄支店(121)



歌志内支店(094)



*美幌支店(154)



富良野支店(105)



山鼻支店(007)



*本別支店(138)



*美唄支店(089)



*根室支店(144)



*西野支店(180)



美香保支店(179)



*旭川支店(101)



*函館支店(021)



*小樽支店(041)

第2章

早稲田建築 in北海道 100選

2011

北海道に現存する建築物の中から、稲門建築会の会員が関わった建築を、早稲田大学建築学科創設100周年にちなんで、100点を選び出しました。

限りある資料と情報によって作成しましたので、内容や精度において至らぬ点が多々ありますが、これを機会に今後更に充実した資料となりますよう北海道支部会員、元会員はじめ全国の早稲田建築関係者各位のご協力をお願いいたします。

担当： 秋山陽一郎 (苗42)、下村憲一 (苗45)、新貝孝之 (芽62)

記入凡例

番号	建築名	所在地、建設年(頃)
	会員名(卒業年)会員種別 所属(会員名会社は無記入) 担当分野(設計、施工等)	建築写真
	受賞等	

注記:

記載順序: 主たる関係会員の卒業年順に記載しました。

建築名: 検索可能な名称を優先しました。
(正式名称と異なる場合もあります)
(現在名称と異なる場合は併記しました)

会員種別: 北海道支部会員 ; 無印
元支部会員(転出); ○
他支部会員 ; ◇

1 旧新日鉄所中島会館 室蘭市 1939 改築1989

(現.花と工芸の館エレガ)

佐藤功一(名誉教授)◇
設計



注:早稲田大学建築学科を創設し大隈講堂設計した建築家佐藤功一

6 網走市立郷土博物館 網走市 1936

田上義也(友T05)
設計



2 目貫商店(現北斗ビル) 函館市 1921

中村 鎮 (苗 T3) ◇
設計



7 札幌市教育文化会館 札幌市 1977

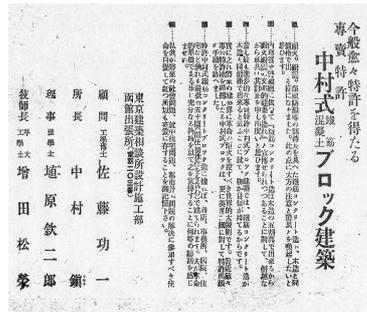
田上義也(友T05)
設計



80北海道建築賞

3 鎮ブロック工法 函館市 1920~

中村 鎮 (苗 T3) ◇
設計



8 本郷新記念彫刻美術館 札幌市 1981

田上義也(友T05)
設計



4 旧小熊邸(現ろいず珈琲館) 札幌市 1927

田上義也(友T05)
設計



9 出光興産北海道支店 (現存せず) 札幌市 1962

村野藤吾(苗 T7) ◇
設計



5 旧佐田邸 札幌市 1928

田上義也(友T05)
設計



10 北見ハッカ工場(現 記念館) 北見市 1934

太田正之(苗T9)
田中組、施工



稲門建築会北海道支部設立、初代支部長

11 旭川市庁舎

旭川市 1958

佐藤武夫 (苗 T13) ◇
設計



1958年学会作品賞

12 北海道開拓記念館

札幌市 1970

佐藤武夫 (苗 T13) ◇
設計



1970年学会作品賞、1972BCS賞

16 五島軒

函館市 1934

亀井勝次郎 (苗9)
設計



17 旧拓銀札幌南支店

札幌市 19

亀井勝次郎 (苗9)
拓銀管財部、設計

小坂國男 (苗09)
木田建業、施工



13 札幌逓信病院 (現NTT東日本札幌病院) 札幌市 1958

吉田万作 (友T13)
札幌逓信局建築部、設計



(一部しか現存せず) 2000増改築

18 札幌護国神社

札幌市 1968

吉田三郎平 (苗9)
設計



14 棒二森屋

函館市 1936 増築1966

明石信道 (名誉教授) ◇
設計

掛上睦美 (苗32) ○
大成建設、施工所長

秋山陽一郎 (苗42)
大成建設、施工



19 北海学園大学3号館

札幌市 1965

吉田三郎平 (苗9)
設計



15 札幌テレビ塔

札幌市 1962

内藤多仲 (名誉教授) ◇
設計



20 札幌丸井今井本店

札幌市 1975

小坂國男 (苗09)
木田建業、施工



21 愛別町役場 愛別町 1966

渋谷威雄 (苗19)
間組、施工



26 アトリエインディゴ 札幌市 1962

竹山 実 (苗31苗院33)◇
設計



22 ホテル三愛 (現 札幌パークホテル) 札幌市 1964

鮎瀬善郎 (苗25)
大成建設、施工所長



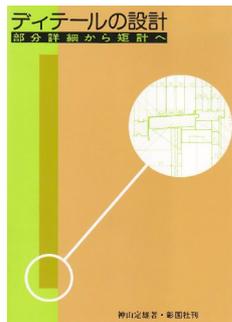
27 北電本社ビル 札幌市 1968

山野憲一 (苗32)
栄建築設計事務所、設計
徳永雅勇 (苗32)○
大成建設、施工



23 ディテールの設計—部分詳細から矩計へ 1980

神山定雄 (苗26)
北海道東海大学教授



28 札幌市南区民センター 札幌市 1979

山野憲一 (苗32)
北海道都市建築総合事務所、設計



24 北海信金本店 余市町 1985

岩井一三 (苗院30)○
日建設計、設備設計



29 北海道本庁舎 札幌市 1992

白石和夫 (苗32)
道庁建築課、監理
橋本 侑 (苗38)
久米設計、監理



25 中村記念病院 札幌市 1990

竹山 実 (苗31苗院33)◇
設計



2010JIAキタコブシ賞

30 GEH 長汐邸 江別市 1976

鈴木 恂 (苗34苗院37)◇
設計



31 21世紀の日本のかたち(32) 地域学(その2)函館学

戸沼幸一 (苗34苗院36)◇
早稲田大学教授、都市計画



36 雪の美術館

佐々木裕志 (苗35)
鹿島建設、建設統括

旭川市 1991



32 札幌南高等学校

板谷 薫 (苗34)
板谷土建、(母校)施工

札幌市 1995



37 苫小牧ファンタジードーム(現ナガサキヤ) 苫小牧市1990

金榮素夫 (苗36)
清水建設、施工計画



33 モエレ沼公園 水系施設

佐々木 喬 (苗34) ◇

札幌市 2003



土木学会デザイン賞2007 最優秀賞

38 北星大学体育館

金榮素夫 (苗36)
規矩建築計画研、構造計画

札幌市 1995



34 優佳良織工芸館

佐々木裕志 (苗35)
鹿島建設、建設統括

旭川市 1980



39 サッポロファクトリー

横沢国夫 (苗36)◇
大成建設、設計

可児才介 (苗42)◇
大成建設、設計

立原 敦(苗46)○
大成建設、設備設計

札幌市 1990



1993 BCS賞

35 国際染織美術館

佐々木裕志 (苗35)
鹿島建設、建設統括

旭川市 1986



40 浅井学園図書館(現 北翔大学図書館) 札幌市 1995

後藤牧人(苗37 苗博48)
構造計画研究所、構造設計



41 札幌グランドホテル

札幌市 1966

橋本 侑 (苗38) ○
久米設計、構造設計



46 郵政小樽貯金事務センター

小樽市 1986

松崎雄一 (苗39)
松井建設、施工



42 北海道ホテル

帯広市 1995

樋口裕康 (苗38苗院40)
象設計集団、設計



47 大和銀行ビル(現井門札幌ビル)

札幌市 1995

近 勝廣 (苗40)
大成建設、施工所長



43 北海道立釧路芸術館

釧路市 1998

樋口裕康 (苗38苗院40)
象設計集団、設計



48 ホテルアルファサッポロ (現ホテルオークラ札幌)札幌市1980

上原秀晃 (苗40)
観光企画設計社、設計



44 高橋建設社屋

帯広市 1999

樋口裕康 (苗38苗院40)
象設計集団、設計



2002 赤レンガ建築奨励賞

49 アルファコート

札幌市 1983

上原秀晃 (苗40)
DCB、設計



45 岡田設計社屋

札幌市 1962

岡田孝生 (苗院43)
設計



50 アルファリゾート トナム

占冠村 1985

上原秀晃 (苗40)
観光企画設計社、設計



1987BCS賞、1989北海道赤レンガ建築賞

51 ホテルアルファ ザ・タワー1.2 占冠村1987~1989

上原秀晃 (苗40)
観光企画設計社、設計



56 サッポロビール北海道工場 恵庭市 1989

秋山陽一郎(苗42)
大成建設、統括所長



学会作品選集、1990村野藤吾賞

52 TWIN PATIO 札幌市 2009

上原秀晃 (苗40)
DCB、設計



2005アカシア賞

57 ユニオン・コンピュータサプライ社屋 旭川市 1990

大矢二郎(苗42 苗博48)
設計



1992学会作品選集

53 十勝ヘレンケラー塔 音更町 2004

石山修武(苗41苗大43)◇
早稲田大学教授、設計



58 白金インフォメーションセンター 美瑛町 1993

大矢二郎(苗42 苗博48)
北海道東海大学教授、設計



1994 北海道赤レンガ建築賞、1994-95学会作品選集

54 富良野演劇工場 富良野市 2000

中村隆治 (苗42)
竹中工務店、建設統括



59 北海道東海大学芸術工学研究館 旭川市 1994

大矢二郎(苗42 苗博48)
北海道東海大学教授、設計



1994年度学会北海道建築奨励賞、1993旭川市都市景観賞

55 サッポロビール博物館 札幌市 1890 改修1987,2006

秋山陽一郎(苗42)
大成建設、施工所長

横沢国夫(苗36)◇
大成建設、設計

立原 敦(苗46)○
大成建設、設備設計



BELCA賞1987、札幌市都市景観賞、学会作品選集

60 西神楽の家 旭川市 1998

大矢二郎(苗42 苗博48)
設計



61 三浦綾子記念文学館 旭川市 1978

大矢二郎(苗42 苗博48)
設計監修



1999旭川市都市景観賞

66 室蘭新日鉄跡地計画 室蘭市 1990

入江正之(苗44苗院47)○
室蘭工業大学教授、計画



62 KITAホテル 札幌市 1991

黒川雅之(苗院44)◇
設計



67 札幌東急イン 札幌市 1980

富田祐治(苗院46)○
東急コンサル、設計



63 ユニ東武クラブハウス 長沼町 1995

黒川雅之(苗院44)◇
設計



68 本別町ステラプラザ 本別町 1990

下村憲一(苗45)
環境設計、設計



1991赤レンガ建築賞、1992学会作品選集

64 釧路日本赤十字病院 釧路市 1984

根岸昭次郎(苗43)
佐藤工業、施工



69 総合福祉保健センター リふれ 長沼町 2000

下村憲一(苗45)
環境設計、設計



1998長沼福祉文化村構想全国コンペ最優秀賞

65 湯の川竹葉新葉亭 函館市 1995

大蔵諒一(苗44 苗院46)
設計



70 石狩市民図書館 石狩市 2001

下村憲一(苗45)
環境設計、設計



2004公共建築賞、日本図書館建築賞、2002学会作品選集

71 道立オホーツク流氷公園交流館 紋別市 2010

下村憲一 (苗45)
環境設計、設計



76 中の沢の家 札幌市 2001

染谷哲行 (苗48)
アルクム計画工房、設計



2005きらりと光る北の建築賞

72 泊原子力発電所1.2 泊村 1989~1991

久保田知弘 (苗46)
大成建設、施工



77 後藤純男美術館 上富良野町 2001

染谷哲行 (苗48)
アルクム計画工房、設計



73 アイスドーム 旭川市、占冠村 2000~

粉川 牧 (苗46)
北海道東海大学教授
構造計画、設計



2002国際シェル空間構造学会金賞

78 森の家 札幌市 2005

染谷哲行 (苗48)
アルクム計画工房、設計



2006JIA住宅大賞「ハルニレ賞」

74 六花亭 真駒内ホール 札幌市 2003

古市徹雄 (苗48苗院50)◇
設計



2006学会作品選奨2003赤レンガ建築賞

79 立体造形作品 札幌市 1985~2006

小林令明 (友産48)
彫刻造形作家



75 ファームトミタ 一連の建築 中富良野町 1993~

染谷哲行 (苗48)
アルクム計画工房、設計



80 帯広市図書館 帯広市 2006

奥 周盛 (苗49)
監理

下村憲一 (苗45)
環境設計、設計



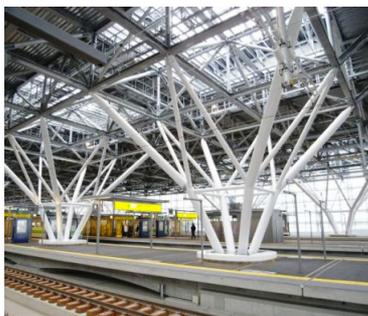
81 マッカリーナ 真狩村 1996
内藤 廣 (苗49苗大51)◇
設計



86 セイコーエプソン千歳事業所 千歳市 2004
井出正憲 (苗54) ○
竹中工務店、施工所長



82 旭川駅 旭川市 2010
内藤 廣 (苗49苗大51)◇
東京大学教授、設計



87 作品集「宇宙からの贈り物」、版画「テラの原風景」
栗田正樹 (苗54 苗院56)
イメージスケッチとCGアート



1996目黒雅叙園アートプライズ

83 インテリアヤマト 札幌市 1992
白 俊彦 (苗51)
設計



88 札幌センタービル 札幌市 1987
原 健司 (苗54) ○
鹿島建設、施工



84 パーソナルハイツ篠路公園 札幌市 1995
白 俊彦 (苗51)
設計



89 函館市立弥生小学校 函館市 2011
斎藤民樹 (芽55)
二本柳建築研究所、設計



85 札幌ドーム 札幌市 2001
井出正憲 (苗54) ○
高井啓明 (苗55苗院57)○
竹中工務店、設計

久保勝裕 (苗63)
石塚和彦 (苗H05)
大成建設、設計



2002赤レンガ建築賞,2003BCS賞

90 ニセコ生活の家 二セコ町 1997
柳田良造 (苗56) ○
ブラハアソシエイツ、設計



91 当別里山田園住宅

当別町 2002

柳田良造 (苗56) ○
プラハアソシエイツ、設計



96 ブーランジェリー ジン

真狩村 2010

新貝孝之 (芽62)
設計



92 稚内市中心市街地活性化計画

稚内市 1996~

瀬戸口 剛 (苗61苗博H03)
北海道大学教授、都市計画



97 札幌・東区の家

札幌市 2010

新貝孝之 (芽62)
設計



93 鷗(ふくろう)のねじろ

屈斜路湖畔 2006

辻谷英樹 (苗61)
MOBI建築都市研究所、設計



98 柏林台の家

帯広市 2006

石塚和彦 (苗H05)
設計



94 マイカル小樽

小樽市 1999

久保勝裕 (苗63)
大成建設、計画
石塚和彦 (苗H05)
大成建設、設計



99 宮ノ森の家

札幌市 2009

石塚和彦 (苗H05)
設計



95 札幌つどーむ

札幌市 1997

久保勝裕 (苗63)
大成建設、計画
可児才介 (苗42) ◇
大成建設、設計
立原 敦 (苗46) ○
大成建設、設備設計



100 Twin Roof

札幌市 2003

藤田 崇 (芽H07)
TAU設計工房、設計



第三章 座談会

「早稲田建築と私」



日 時： 2011年3月31日

場 所： 井門札幌ビル3階会議室

司会者	染谷哲行	(苗 48)
出席者	板谷薫	(苗 34)
	佐々木裕志	(苗 35)
	上原秀晃	(苗 40)
	秋山陽一郎	(苗 42)
	大矢二郎	(苗 42, 苗院 48)
	下村憲一	(苗 45)
	白 俊彦	(苗 51)
	新貝孝之	(芽 62)
	石塚和彦	(苗 H5)
	藤田崇	(芽 H7)

染谷支部長(司会)：今日は年度末のお忙しい中、座談会にご参加いただきありがとうございます。3月11日に起こった東日本大震災がまだ落ち着いていない状況ですが、今回の震災は自然の猛威を前にして建築の限界と可能性について考えさせられました。そんな中、この会の開催を躊躇もしましたが、この1年間編集委員会でまとめてきた内容をご検討いただく機会でもありますので、ご理解をいただき座談会を開くことにいたしました。

今回、早稲田大学建築学科創設100周年を記念した北海道支部の記念事業として、(仮称)北海道早稲田建築の資料を作成する準備を進めております。これまでも北海道支部では、支部創設30周年誌と50周年誌を編纂してきましたが、この機会にデジタルデータとして今わかる範囲で残そうと、1年間にわたり企画、検討、資料収集を進めてきました。内容の詳細は配布資料をご覧くださいと思います。

第1章は北海道に足跡を残した先輩建築家3人の業績

第2章は稲門会員による現存する北海道建築100選

第3章はこの座談会

ということで、今後さらにまとめてまいります。それではまず、今日ご参加いただいた皆さんに自己紹介を兼ねて、早稲田大学に入学して、建築と関わり始めた頃の思い出などからお話いただきしたいと思います。

掲示版に貼られた吉阪先生の「カタツムリ講談」

染谷：それではまず、私から口火をきることにします。私は48年卒で、ちょうど大学紛争が激しい時の入学です。吉阪先生が理工学部長をされていて、ロックアウトされた校舎の掲示版に学生へのメッセージ「カタツムリ講談」が掲示されているのを見て「大学というのは面白い先生がいるところなんだな」というのが印象的な思い出です。



そのあと卒業してから1年間の東京勤務のあと、北大の大学院に入ったのが北海道との永い関わりの始まりでした。初めの頃は稲門建築会というか、早稲田の人たちと会う機会は少なかったのですが、下村さんと出会ったことで今ではこうして深く関わることになりました。ニセコや富良野など、自然の中に建つ建築を設計する機会が多いのは、東京の生まれ・育ちによる北海道に対するあこがれのせいかもしれません。

最初の授業で尾島先生にいきなりくじかれた出鼻

石塚：平成5年卒業の石塚です。理工キャンパスは今では緑が大きく育っていますが、私の最初の印象は本部キャンパスに比べて「すごく殺風景なところだな」と思いました。また最初の授業で、尾島先生が「君たちは建築家にはなれないよ、ほとんどの人は。」と言われ、いきなり出鼻をくじかれたことを強烈に覚えています。またちょうど石山修武先生が赴任されて間もない頃で、設計製図の授業で案が酷評されたときは、自分は本当に建築家にはなれないなと思いました。そういう意味ではかなり厳しい教育を受けた感じです。



もともと前職が大成建設でしたので、本社の仕事や札幌支店勤務がきっかけで、どういう訳か札幌で設計事務所を開くことになってしまいました。昨年染谷さんから声をかけられ、稲門会の集まりに参加するようになって、早稲田という言葉に触れる機会が多くなりました。

自信と優越感を持って入ったスキー同好会

ツモ

白：入学の年は浅間山荘事件があった年で、受験日に高田馬場駅前のワセダボウルのテレビに機動隊突入の中継が映っていたのを鮮明に憶えています。いまの私からは想像が難しいですが、スキーが得意でした。北海道出身ということで、私は自信と優越感を持ってスキー同好会に入ったのですが、予想に反して東京出身の部員は、スキーへの情熱はあるは、お金はあるは、すべてが上で参りました。そんな学生生活でしたが、卒業は51年の第2次オイルショックの最中の年で、まるで就職先がなく北海道の知人の誘いで札幌に戻って設計をすることになり、現在に至っています。



早稲田と聞いて、思い出すのは桜井先生の顔

藤田：専門学校の平成7年卒業です。私は当時東京に住んでいて、学校説明会に参加した時、桜井譲爾先生のお話を聞いて、その自由な早稲田らしい校風に居心地の良さを最初に感じられたので受験を決めました。2年の建築科に入学しましたが、勉強が好きでしたので途中から3年の建築設計科に転入しました。居心地の良さもあって結局4年間



早稲田に通いました。当時、桜井先生は教務主任をされていて学校全体をみておられました。いつもニコニコされていて、まさか構造の先生とは思えない柔らかさと自由を感じました。早稲田と聞くと桜井先生の顔を思い出すほどです。同じく構造の谷資信先生が、当時稲門建築会の会長をされていて学校行事によくいらっしやっていたのですが、もの静かながらもとても温厚な笑顔が強く印象に残っています。専門学校は生徒も年齢職業などバラバラでユニークな人が多く、刺激的で幅の広いものの見方を学びました。卒業後もともと北海道出身だったので、札幌に戻ってきました。

穂積先生の都庁コンペの審査速報から実感した建築界

新貝: 専門学校62年卒業です。北海道工業大学を卒業したあと北大研究生として建築を学び、染谷さんの事務所で働き始めました。それがきっかけで早稲田を知り、そんな面白い学校なら行ってみようという紹介を受けて、編入という形で3年に入学しました。夕方学生が数人の授業の時に、〇〇先生から都庁コンペの審査速報を聞いたことがあります。「いま東京都庁のコンペの審査を終えてきたところです。結果をほんとうはお話したいけど秘密だからできません。でも磯崎さんの案は低層でユニークだった。」と審査員のお一人だった穂積信夫先生か、あるいはお供の北村修一先生だったか記憶があいまいですが、コンペの秘密情報を漏らされました。その時に、今まで雑誌の中の世界だった日本建築界、そのど真ん中に入り込んだな、とすごく実感したことを憶えています。



受験の時に互いに励ましあった学生が尾島先生

佐々木: 35年卒業です。高校の時はどちらかと言えば文科系志望だったのですが、町内に住む早大建築出身の先輩から「早稲田の建築はいいぞ」と強く薦められ、初めて建築の世界にイメージを持ち始めました。高校を卒業するまで札幌より遠くに行ったことがなく、釧路の街しか知らない田舎者でしたので、受験の時は、結構心細かったのです。試験会場近くの芝生で休んでいる時、似たような感じの学生がいたので話しかけると、そいつは新潟からの受験生でした。互いに「受かった



ら仲良くしようや」と言って励ましあったわけですが、二人はともに無事入学できて喜びあいました。その相手が後の尾島俊雄教授でした。

入学後の東京での学生生活は、何をやっても楽しく、面白く思えました。その頃流行っていた歌声運動にのめり込んだり、学外に出てフランス語なども楽しく学びました。その中でも一番打ち込んだのが能楽の世界でした。早稲田正門近くの学生会館3階にあった宝生会にちょっと立ち寄ったのがきっかけで入り浸り、生涯の趣味になりました。

建築の授業で思い出深いことは、1年の時に聴いた内藤多仲先生の最終講義です。3年の時に東京タワーの建設が始まり、なんて馬鹿でかいものが建つだろうと驚いて見ていたことを思い出します。

卒論は南和夫先生のところで、日本ではまだ1か所しか行われていないケーシングによる深礎の研究をしました。卒業後は鹿島建設で主に現場施工をやってきましたが、退職後も地元の施工会社で建築と関わりながら趣味の能楽を続けてきました。今73歳ですが、後継者も見つかり、仕事をやめることにしました。これからは趣味の世界を悠々と、そして存分に、楽しみたいと思っています。

内藤先生が眠れなかったキャサリン台風の夜

板谷: 34年卒業です。私の父は昭和10年から伊藤組の前身の田中組の田中銀次郎さんの下で修業してまして、銀次郎さんが昭和9年だったでしょうか、札幌の会社は社員に任せて自分は大連に行くと言い、中国大陸に渡りました。その時に父は独立し、つくった会社が板谷土建です。その後父は赤紙1枚で戦争に行きましたが、その間祖父が会社を見てくませて終戦を迎え、昭和21年に父は無事戻り、会社も株式会社になりました。私が高校2年の時、父に「将来お前はどうするんだ。そろそろ決めなきゃ駄目だぞ」と言われました。その年に父は腸閉塞を患い、年の暮に北大病院に入院したのですが、そこで小さい頃に見た上棟式での餅まきの情景などが頭に浮かび、建築の道に進もうと決めました。それを父に言いましたら「俺の後を継ぐ気なら間違いだぞ」としこたま怒られ反対されました。私は「いや、そんなつもりではなく、自分は建築が好きだから学びたい」と言って説得しました。当時田中組の太田社長が早稲田



の大先輩で、以前に父と一緒に何度かお会いする機会があり早稲田の建築学科に憧れていました。

大学時代の思い出は、まず池袋に三越がありました。その構造設計を内藤先生がされていて、最新工法のH形鋼全断面梁による建物でした。当時はラチス梁が主流だったので、現場見学でそれを見たときは感激でした。また東京タワーも現場見学をして途中まで登ったのを憶えています。工事中にキャサリン台風がありました。内藤先生が後日「あの夜は台風が過ぎるまでタワーがもつ心配で眠れなかった。」と無事にほっとされたと聞き、私はあんな大先生でもやはり心配するのは同じなんだと思いました。

卒業後伊藤組土建に入社しましたが、ひとつ現場を済ませた後、大成建設さん施工中の東京赤坂のホテルニュージャパンの突貫工場の現場応援に入りました。12月の年末から6月までの半年間赤坂の現場に寝泊まりしていました。その頃大学の実験室でハイテンボルトにも出会いました。竣工式の二次会がホテルの地下にできた日本初のクラブ、ラテンクォーターで行われ、その時の華やかな様子は忘れられません。

それからずーと寝食を忘れるくらい建築と関わってきて、今や75歳になりました。初代支部長の太田正之さんをはじめ、歴代支部長と話をしたことがあるのは、私くらいになりました。昔は亀井さんの関係で拓銀荘の座敷を提供してもらって支部の集まりをしていました。芸者さんも呼んで和やかな宴会で親交を深めていました。

卒業間近の山手線から見た建築が竹山先生との出会い

下村：私は昔小牧出身で、3代目の道産子です。父は建築士で、私は小さい頃から現場に連れられ建築の面白さを肌で感じていました。進路を考え始めた頃、知人から話を聞いていた父が「建築だったら早稲田がいいぞ」と盛んに私に吹き込みました。



そんなことで入学した私は、現在の西大久保のキャンパスの初めての1年生だったと思います。中庭の外構工事も未完成でしたが、田舎の私にはすごく新鮮でした。初めの頃、本部キャンパスにあった劇団「自由舞台」に入部して、舞台装置係になりました。1年間芝居のセットを大工のように作っていました。ある時ハッと気が付いて、理工学部にもどり建築を勉強し始め、今日に至っています。

私たちの頃はちょうど大学紛争が盛んになり始めた時点で後半はあまり大学が落ち着いていませんでした。劣等生で多少問題があっても早く卒業させられた組だと思います。卒業間近に山手線から「一番館」をみて、竹山実さんの建築にはじめて出会い、東京青山の事務所に入れてもらって、建築をしっかりと学びました。30歳の時に北海道に戻り、札幌で独立しましたが、竹山さんが札幌出身で早稲田の先輩でもあり、同期の山野憲一さん(五代目支部長)に私を紹介してくださいました。北海道支部との出会いもそこから始っています。

吉阪先生のお薦めで柴田さんの所に3年勤める約束が、

上原：40年卒業です。私の頃はまさに安保闘争真っ只中でした。建築学科のデモ参加者は皆無でしたので、授業の初めに「なぜ参加しないのか」とアジっていました。午前中はバイト



で、午後から夜まで安保デモという生活をしていました。自然成立の夜、国会議事堂周辺での思い出は忘れがたいものでした。その後も理工学部というより、文学部の学生のように感じました。じつは私は吉阪先生をただひたすら尊敬しておりましたが、卒業の時に吉阪先生から観光企画設計社という事務所を紹介されました。他ならぬ吉阪先生のお薦めですので柴田所長にお会いし、最低3年勤める約束で入社しました。柴田さんは早稲田のⅡ理の1期生として坂倉事務所に勤めながら建築を学ばれた真面目な方でした。

北海道との関わりはホテルアルファ札幌の設計を担当してからです。当時のオーナーから「実はハウジングをやりたいんだ」と相談され、タイル打ち込みのコンクリートブロックを開発しはじめたことがきっかけで、今まで札幌に住み続けています。当時、琴似の寒地建築研究所の川治正則さん(当時寒建部長)にブロックの件で相談したところ、「北海道に住んでない人に技術協力はできないよ」と言われ、すぐに東京から引っ越してきました。それ以来、一般的なブロックとは全く異なる組積造工法のアルファブリックの開発に打ち込み、工場も江別につくり低層集合住宅のプロジェクトに利用してきました。

いつからこの稲門会に出席し始めたか定かに憶えていませんが、トマムの仕事も含め、独立後もずっと札幌で生活しながら、北海道と東京の仕事をしています。

吉永小百合の生身を見に通った文学部

秋山：42年卒業です。早稲田の建築を受けた動機が皆さんよりすこし不純でして、建築の試験には鉛筆デッサンがあったので、筆記試験のウェイトは他より少ないだろうと思ったからです。面接でも工業経営学科ならすぐ入れたけど、結局最後まで建築で粘りました。入学した年にケネディー暗殺があって、朝早く眠いのには「大変だぞ」と父に叩き起こされ衛星中継のTVニュースを見た事を憶えています。



大学での最初の思い出は39年の新潟地震で、先生たちはみんな新潟の調査に行ってしまうて授業が全くなく毎日休講、休講となっていました。その頃硬式テニスをしていたので、テニス部麻雀科といった学生生活でした。テニスコートと雀荘に明け暮れた学生時代でしたので建築学科の思い出はあまりなく、出席番号が近い割には同期の大矢さんとも北海道に来てから親しくなった次第です。

研究室は松井研に入り、光弾性の実験をしたくて行っただけですが希望者が多くて駄目でした。それで日本設計にいった大越君と一緒に大きな機械でコンクリートをつぶす実験をして真面目に卒論を書き、無事卒業できました。2年の頃から授業の半分が西大久保キャンパスでしたが、その頃日本一の超高層といわれていた18階の研究棟はまだ工事中でした。

そう、そう、忘れられないのは吉永小百合の生身を見に通った文学部に通ったことです。当時彼女の授業動向が判る怪文書も出ていて、情報をみては英語の授業をわざわざ文学部まで行って受けました。いつも彼女は前の方の真ん中に座るのですが、その後ろの方に座って見ていました。いつも両サイドを眼鏡をかかけた女性がガードしていましたが、吉永小百合はやっぱり光っていましたねえ。

安東先生に教わった酒の飲み方と作法

大矢：学部は秋山さんと同じく42年の卒業で、大学院へ進みました。高校は都立日比谷高校でしたが、校舎が国会議事堂の近くだったので、高校入学当時は安保闘争デモで毎日騒然としていました。でも私はあまり政治に関心がなく高校ではラグビーに朝から晩まで熱中していました。北海道選出代議士の町村信



孝さんは同じラグビー部の1年後輩で、よく一緒に試合に出ました。

その後、早稲田の建築に入りましたが、さすがに大学のラグビー部には入りませんでした。成岡庸治さんという人は高校のラグビー部1年先輩ですが、彼も早稲田に進み、その後「革マル」の委員長になった人です。学園紛争が始りかけていた頃で、たまたま戸山公園を通った時に彼がアジ演説をやっている、私の顔を見つけると「お前も早稲田にいるなら革マルに入れ」と誘われ、寸前のところで逃げ帰ったことも思い出されません。

当時建築学科では「稲門建築新聞」が発行されており、その新聞部に誘われて2年の時に入部しました。隔月で学生と同窓会事務局が交互に編集していました。入部してすぐコラムを書かされたり、先輩訪問や現場訪問コーナーでは、教授に紹介状を書いてもらっては坂倉事務所にいた室伏次郎さんなど、有名な先輩を取材したりしました。大抵の先輩はインタビュー終了後、「ご苦労さん、それじゃ一杯飲みにいこう」と食事に誘っていただき、何かと役得がありました。その当時の新聞は今でも自宅に残っています。

私は安東勝男先生の研究室出身で、大学院も入れると結構長い間アンカツさんのお世話になりました。実は、手をとって建築を教えていただいた記憶はあまりありませんが、酒の飲み方はしっかり教わりました。たとえば飲み屋で醤油がほしい時に「ムラサキ」などと、素人が業界用語を使っただけではいかんとか、酒の飲み方や作法については厳しく教えられました。また、自分の建築について文章で云々するのは筋が違う、「建築は見れば判る」というのが先生の基本姿勢で、私も今の東海大学で、アンカツさんが私に接していたのと同じように学生に接するようにしています。

司会：楽しい自己紹介をありがとうございます。それでは次の話題に入らせていただきます。今回第1部で生誕100年以上の大先輩3人についてフィーチャーすることになり、それぞれ田上義也さんを藤田さん、中村鎮さんを石塚さん、亀井勝次郎さんを白さんが担当してまとめました。お手元の資料を見ながら思い出や感想などを語っていただければと思います。まず田上さんですが、上原さんの建築にはライトが近く感じます。ライトつながりで田上さんはいかがですか。

ライトの構造について田上さんと話ができれば、

上原:もちろんライトは好きで、ずいぶん研究しました。私が考えたブロック造は、じつはライトのテキスタイルブロックと同じです。どちらも空積みのレインフォースドメーソンリー (RM) で、小型のPC版を鉄筋で編んでいるともいえるものです。モルタルで積んでいく日本のコンクリートブロックと基本的に異なるものです。私は構造が好きなので、意匠もさることながらライトの構造的考え方に興味がありました。木造も一見日本的に見えますが、ライトの場合は版構造でした。田上さんとは残念ながら生前の面識はありません。もしお会いしていたら、ひたすらライトのことばかりをお話したかもしれません。

秋山:明石信道さんがライトの帝国ホテルの本をまとめられましたね。明石先生がライトの事務所に入っていましたので、そこで田上さんと会っているかもしれませんね。お二人の年は12歳くらい違うようですが。

板谷:じつは札幌の宮が丘ユースホステルは板谷土建の施工です。先代社長が曲面の外壁の施工が大変で、すごく赤字を出したので「田上先生の建築はもう絶対しないぞ」と言っていました。

上原:支笏湖のユースホステルは今だに営業中で50代のおばちゃん一人で頑張っています。真ん中に螺旋階段がある建物もそのままですが、建物もだんだん痛んできていました。でも経済的にたいへんなので、何か力になってあげられないかなと思います。

藤田:今回、田上さんの作品を調べてみて、田上さんらしさを強く感じる初期作品の多くが既に無くなっている事を痛感しました。長い年月が経ちながらも現存しているもののほとんどは大事に扱われ残っていますが、この少数となってきた現存作品の更なる維持活用を強く願うと共に、なにかしらのお手伝いが出来ないものかと思います。

ツクモ
白:田上さんは稲門建築会の会合にはよく出られていましたよね。私も晩年二、三度お会いしたことがありますが、その前はいかがでしたか。

皆さん:よくいつも出られていました。

司会:平成三年にお亡くなりになられて、新しい方の北一条教会で葬儀がありました。お歳になってからは結構ご挨拶の話が長かった記憶があります。

下村:札幌で建築学会100周年の全国大会があった時、ビール園で稲門建築会の歓迎会がありましたね。その挨拶で、田上先生が舞台にあがりましたが、話が長いのと同時に、話しながら少しずつ前へ進まれるので、演台からいつ落ちるか気が気でなかった思い出があります。

昨年が亀井さんの生誕100年にあたります。

司会:亀井さんが昨年ちょうど生誕100年なんですね。すこし早く1981年にお亡くなりになっているので、直接お会いしている方は少ないですね。

板谷:1974年に拓銀をお辞めになるまで、拓銀荘でよくお会いしました。お座敷のせいもあり、いつも和気あいあいの会でした。一緒にお仕事はしたことがないのですが、初代太田会長をはじめ皆さん大変紳士でした。

下村:私が初めて参加した時、もう場所は「東天紅」でした。亀井さんは一番上の席で直接はお話できませんでしたが、山野さんから亀井勝一郎の弟なんだぞと教えられ遠くから眺めていた記憶があります。

ツクモ
白:拓銀支店の多くの設計を手掛けられ、当時の拓銀店舗のイメージをつくられた方なのですが、現存するものが少なくなっています。旭川、函館などはまだ当時の姿で残っておりますが、最近の写真がありません。

大矢:旭川の4条通りにある旧・拓銀支店もそうですか。今は北洋銀行の看板が架かっていますが、それでよければ写しましょう。

秋山:私はその拓銀旭川支店の改修工事をしました。外壁の注入補強工事をしたので、大丈夫な状態でいまでも残っているはずですよ。ちなみに昔の施工も大成建設です。函館支店は東海興業施工です。

ツクモ

白：札幌都心の支店はあまり残っていませんが、拓銀本店、山鼻、小樽花園やシンボルマークなどその時代の拓銀イメージを建築で作っていかれたのが亀井さんでした。

板谷：札幌山鼻支店の拓銀はわが社で解体し、マンションに生まれ変わりました。拓銀7番目の支店で、金庫室がえらく頑丈で苦労しました。簡単に壊れても問題ですが、解体は大変でした。拓銀では各支店建設順に番号が付いていましたね。

「建築は芸術である」と論陣を張った建築論の論客

司会：中村鎮さんについてはいかがですか。

石塚：私は今回担当になって初めて鎮ブロックについて調べて、調べました。去年夏に函館に行く機会があったので、ホームページなどで調べて、いろいろ尋ね歩いたのですが、なかなか見つかりませんでした。

司会：友人の函館の建築家に聞いたら、建物は知っていたけど、まさかブロック造とは知らなかったと言っていました。ところで大矢さんが授業で中村鎮さんのことを扱っていると聞きましたが。

大矢：実は中村鎮さんについては、鎮ブロックよりも先に、大正期に「建築は芸術である」といって論陣を張った建築論の論客として知りました。建築評論家の長谷川堯さんが、「近代建築史概説」という本に「俊鎮論争」のことを書いています。これによると「建築非芸術論」を唱える東大の野田俊彦と、それに反論した中村鎮の間に起きた芸術論争だった。関東大震災があった大正12年頃、佐野利器などの東大派は構造第一主義で、建築は技術であって芸術ではないという考えが主流であった。それに対して鎮さんは果敢に「いや建築は芸術の一分野である」と反論した人でした。一方でその後、鎮ブロックの開発も行うなど、すごく幅の広い人だったのですね。実は、私は2007年、函館市の臨海研究所が「赤レンガ建築賞」の候補になった時、現地審査に行って、はじめて鎮ブロックの存在を知りました。その経緯を2008年1月の北海道新聞夕刊の「魚眼図」にエッセイとして書いたことがあります。(同記事コピーは第1章中村鎮のページに掲載)

ちなみに、村野藤吾さんが鎮さんの4年後輩で、鎮さんとも親交があったそうです。

上原：私は中村さんのことは今日まで全く知りませんでした。新しいブロックを開発したということで、親近感を感じます。現在、北海道では火山灰を骨材にしたコンクリートブロックが一般的ですが、じつは私のアルファブロックはモルタルで接着しない画期的なブロックです。先ほどお話ししたとおり、ライトのテキスタイルブロックも私のアルファブロックも空積み工法です。その点、鎮ブロックはどのような工法なのか、たいへん興味がありますね。

司会：中村鎮が亡くなる昭和8年に鎮ブロックによる拓銀滝川支店が完成しています。設計者の臼井長吉は道庁技師ですが、中村鎮が設計した道庁倉庫(大正13年)などを通して鎮ブロック工法を習得したといわれています。

秋山：拓銀滝川支店はブロック造とは思えない古典主義的な外観で、内部は2階吹き抜けの大きな空間があります。歴史的建築物として大成建設が補強改修工事を行いました。

大矢：函館の臨海研究所も、鎮ブロックによって大正15年に建てられた歴史的建築物ですが、3年前に復元されて赤レンガ建築賞の候補になっています。どちらも100年近い時を経ているのですが、その価値は今も色褪せていないようです。

司会：今回の企画にぴったりのお話が出ましたので、そろそろ座談会を終わりたいと思います。建築と共に歩んだ三人三様の大きな足跡を偲んで、私たちもその背中をみながら歩いていきたいと思います。今日はありがとうございました。



編集委員

秋山陽一郎 (苗 42)
下村憲一 (苗 45)
染谷哲行 (苗 48)
白 俊彦 (苗 51)
新貝孝之 (芽 62)
石塚和彦 (苗 H5)
藤田崇 (芽 H7)

※ 作品情報提供のお願い

「第2章 早稲田建築 in 北海道100選」は、建築学科創設100周年にちなみ100選としましたが、まだまだ調査不足で載せきれいていません。これからも会員の皆様の協力を得て内容を充実させて行きたいと思しますので、自薦他薦を問わず情報をお寄せ下さい。

作品は、設計および施工、その他の分野で携わった方も掲載しておりますのでよろしくお願い致します。特に賞をいただいた作品は可能な限り網羅したいと思しますので情報をお寄せ下さい。

稲門建築会 北海道支部

支部長 染谷哲行

som@yacht.ocn.ne.jp

011-281-1515

アルクム計画工房

編集会議日程記録

場所：支部長事務所

第 1 回 2010 年 3 月 11 日
第 2 回 2010 年 4 月 02 日
第 3 回 2010 年 4 月 22 日
第 4 回 2010 年 5 月 20 日
第 5 回 2010 年 6 月 17 日
第 6 回 2010 年 8 月 19 日
第 7 回 2010 年 9 月 16 日
第 8 回 2010 年 10 月 14 日
第 9 回 2010 年 11 月 18 日
第 10 回 2010 年 12 月 16 日
第 11 回 2011 年 1 月 20 日
第 12 回 2011 年 2 月 24 日
第 13 回 2011 年 3 月 24 日
第 14 回 2011 年 3 月 31 日
第 15 回 2011 年 4 月 26 日
第 16 回 2011 年 5 月 19 日
第 17 回 2011 年 6 月 22 日

完成日：2011 年 6 月 30 日

発行日：2011 年 7 月 20 日 支部総会

発行者：稲門建築会 北海道支部